

# News Letter

## Graduate School of Education

巻頭言 稲垣 恭子 研究科長 ②

名誉教授から 皆藤 章 ③

研究ノート ④

教員から 広瀬 悠三 教育・人間科学講座 准教授  
院生から 藤村 達也 教育社会学講座 修士課程2年  
社会人院生から 三井 真吾 教育方法学講座 修士課程2年  
留学生から 李 沐陽 教育認知心理学講座 修士課程2年

活動報告 ⑥

臨床教育実践研究センターから  
岡野 憲一郎 連携教育学講座 教授 臨床教育実践研究センター長  
教育実践コラボレーション・センターから  
石井 英真 教育・人間科学講座 准教授

国際交流事業 ⑦

グローバル教育展開オフィス  
安藤 幸 グローバル教育展開オフィス 講師  
オックスフォード大学  
稲垣 恭子 研究科長  
ハワイ大学 RAPPLEYE, Jeremy 教育・人間科学講座 准教授  
ドルトムント工科大学  
嵩倉 美帆 臨床教育学講座 博士後期課程3年

若手研究者出版助成事業 ⑩

諸記録 ⑬

1. おもな出来事(H29.11.1～H30.3.31)
2. ハラスメント防止に関する研修会
3. 入試結果(H30年度)
4. 学位授与件数(H29年度)
5. 教育職員免許状取得状況(H29年度)
6. 外部資金受入れ(H29・H30年度)
7. 科学研究費補助金(H30年度)
8. 人事異動(H29.11.1～H30.4.30)
9. 教員寄贈図書リスト(H29.4.1～H30.3.31)
10. 基金納付者リスト

諸報 ⑮

新任教員・事務職員紹介



#### 京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製菓、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

## 研究科の再編とこれから



研究科長・学部長 稲垣 恭子

教育学研究科は、今年度(平成30年度)からこれまでの2専攻を1専攻に統合し、「教育学環専攻(Interdisciplinary Studies in Education)」に再編し新しくスタートすることになりました。講座編成も、11講座から5講座(教育・人間科学講座、教育認知心理学講座、臨床心理学講座、教育社会学講座、連携教育学講座)になり、学部との繋がりもよりみえやすくなっています。

「教育学環専攻」という名称には、専門研究をベースに分野を超えた融合的な知や実践との往還によって、時代や社会の課題やニーズに柔軟に対応しうる重層的な相互連環(スパイラル)組織という意味がこめられています。もちろん、これまでも研究科では「こころ・人間・社会」をキーワードに、広い意味での教育についてさまざまな分野や視点から研究・教育を行ってきました。人間の誕生から終焉までの生涯にわたるプロセス全体を対象とする教育研究においては、専門の深い知見と同時に分野を超えて人間を理解する横断的な視点が必要であることはいうまでもありません。

とくに近年は、教育や社会を支えてきたさまざまな制度や規範が揺らぎ、あらためて人間とはなにか、教育とはなにかが問われるなかで、人間や教育を広い視野からとらえなおすと同時に、新たに生じつつある教育の実践的・政策的な課題にもこたえていくことが求められています。組織再編によってまったく異なる方向に舵を切るというわけではなく、これまでの研究科の蓄積の上に、より柔軟かつグローバルな視野にたった研究・教育を発信していける拠点として発展させたいというのが今回の再編の目的です。

研究科のこうした方針を束ねるリエゾン部門として、新しく「グローバル教育展開オフィス」を設置しました。「創生開発ブランチ」と「国際教育支援ブランチ」の2部門を置き、専任の教員2名を中心に研究科で運営する形です。「国際教育支援ブランチ」にはすでに専任の先生が着任され、学術交流やオフィス主催のオープニングセミナーの実施、国際シンポジウムの開催

準備、京都大学ASEAN拠点との連携など精力的に事業を進めています。新しい連携先としてハワイ大学マノア校、オックスフォード大学日産日本問題研究所との学術交流協定も結びました。

この「オフィス」を軸として概算要求を行い、今年度から4年間の計画で新しい学際的教育研究拠点の形成に取り組むことになりました。

研究開発面では、「『日本型』教育文化・知の継承モデルの構築と展開」というテーマで新たにプロジェクトをスタートしました。知のグローバル化やフラット化が進むなかで、いかにして知を継承していくかは、教育(研究)にとって重要な課題であると同時に、人文・社会科学全体の課題でもあります。伝統的な継承スタイルから現代の知の継承をめぐる状況まで、教育文化をベースとした知の継承モデルを、発達・学習・教育といったアプローチから研究し発信する拠点を形成するのが大きな目的です。

教育面では、大学院科目として「グローバル教育科目」を新設し、海外の大学との合同授業や国際フィールドワーク、国際インターンシップなどのプログラムをスタートし、広い視野にたった次世代の研究者の養成に力を入れたいと思っています。

国際化というと、欧米水準に立った研究の推進が前提とされることが多いと思いますが、むしろそうした前提自体も問い直しつつ、新しい教育文化＝知の継承モデルを探求していきたいと考えています。

本研究科では、これまでも学校、地域、家族の新しい秩序を考える実践的な研究・教育を行う教育実践コラボレーション・センターや、いじめ、不登校などの問題について臨床事例に基づいた研究・教育を行う附属臨床教育実践研究センターなど、実践的な課題に長年取り組み実績を積んできました。

今回の再編が、グローバルな視点と実践的な視点とを往還する新しい研究拠点、次世代育成拠点につながればと思っています。



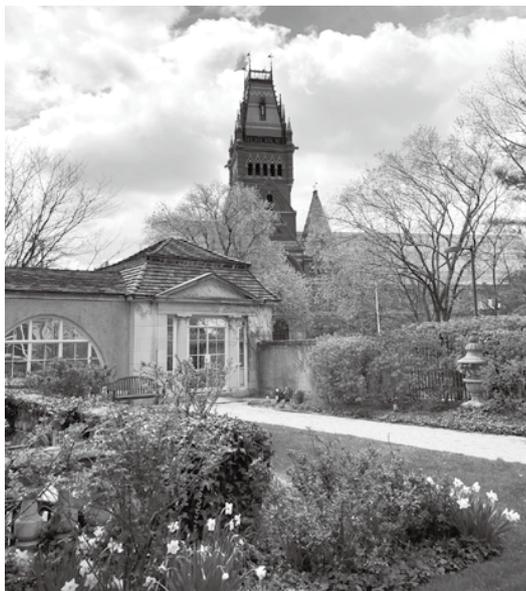
皆藤 章

## BOSTONから

皆さま、お元気でいらっしゃいますでしょうか。わたしは2018年3月に早期退職を致しまして、去る4月5日に山極壽一総長より名誉教授の称号を授与されました。研究科在職中は大変お世話になりましたこと、深く感謝申し上げます。稲垣恭子研究科長の下、ますますのご発展を遂げておられるのではないかと拝察致します。

退職後、4月15日にBOSTONに入りました。Harvard大学Medical Schoolから客員教授として招聘され、12月まで滞り研究生生活を送る予定にしています。医療人類学のArthur Kleinman教授のひとつ隣の部屋を研究室として使わせていただいております。

今年のBOSTONの冬はcrazy winterと呼ばれるほどの寒さで、最初の一週間は雪も降り、わたしも少し体調を崩しましたが、おかげさまで、いまは春が満喫できる日々で穏やかに過ごしております。



Harvardに参りまして大いに刺激を受けましたのは、人間をGlobalに考える学問がここにあるということです。先日、Medical SchoolにMental Healthを専門とする新教授が着任するというので、そのパーティに招待されました。本部キャンパスからShuttleで20分ほど離れたLongwoodに医学部のキャンパスがあるのですが、そのGordon Hallで催されました。わたしのような者が参加してよいのかと思いましたが、医学部の教員だけでなくさまざまな専門領域の教員、秘書の方々が参加しており、これは、研究科長など執行部が、新教授がこれから研究交流すると良いと判断した人たちが集まったということでした。わたしも多くの研究者と顔合わせをする機会をいただき、ありがたく感じたところです。

また、その広さにも驚かされました。本部からMITを経てCharles Riverを越え、BOSTON大学を通してさらに先にMedical Schoolがあるという具合ですから、京都で言いますと、吉田キャンパスから鴨川を越え二条の立命館大学辺りまでがエリアになるという感じです。これほどの広い器のなかにはいると、最初は失見当識に陥りそうになりましたが、いまはようやく定位置を確保したということです。

還暦を迎え、新たな挑戦をしている感じで、日々こころ踊らせています。



研究科会議 昼食(送別)会

### 教員から

教育・人間科学講座  
准教授  
広瀬 悠三



## 狂っているながら、神聖なるもの

今日、私は電車に乗って大学まで来て、同僚の先生と昼食を取り、その後ゼミをした。この一連の行為すべての根底にあるのは、「信頼」である。電車が定時に来ることを、昼食に異物が混入していないことを、発表担当のゼミ生が来ることを信頼して、私は行為していた。合理的かつ完全に知ることができない未来のことであるがゆえに、このようになるだろうと賭け、信頼したのである。知的に証明できないことを行うとは、なんと狂っていることだろう。しかし同時に、完全に知り得ないのに一歩を踏み出すこの行為は、合理性を超えた世界へと足を踏み入れることでもあり、神聖ですらないだろうか。

私たちの生は、このような信頼によって成り立っている。それほどまでに重要でありながら、私たちはこの信頼自体について学校の教科で学ぶことはない。しかし教育において信頼は、その基盤をなすほど大きな役割を担っている。教師と子どもとの間に信頼関係がなければ、子どもは教師の言うことを聞かず、学級は崩壊し

てしまう。子どもは、よく教師を見て、信頼できるかどうか考えている。教師はどうだろうか。嘘をついたり、悪さをしたりする子どもを、教師は信頼しないだろうか(信頼しなくてもよいだろうか)。ここに、教師は過剰かつ法外に子どもを信頼する存在であるという特異性が見え隠れする。このような教育の場での信頼の体験を通して、子どもは信頼をからだで学んでいるのである。

しかしそもそも、他者や事物、そして世界を信頼すること一般はよいことなのだろうか。学問の祖である哲学は、信頼することではなく、疑うことから始まると言われる。単に信頼していると、学問的探究すらできなくなってしまうかもしれない。信頼と人間存在・人間形成はどのように結びついているのだろうか。最近このようなことを考えている。

### 院生から

教育社会学講座  
修士課程2年  
藤村 達也



## 私の「オジさん」たち

私はいつからか、「オジ(伯父/叔父)さん」への憧れを抱いている。それは実際の親族ではなく、理想化されたイメージとしての「オジさん」である。私の中の「オジさん」は、父親のように正面から教育的態度で接するのではなく、ふらっと現れ、飄々とした態度で、自分の知らない世界を教えてくれる、そんな存在である。自分にもそのような「オジさん」がいたならと思う気持ちと、自分もそうなりたいという憧れがある。まずは外見からそれらしく髭を伸ばすことから始めたいが、似合いそうにないので諦めた。

この「オジさん」への憧れは、予備校での経験とも繋がる。学校教師とはそりが合わなかった私であるが、浪人中に出会った予備校講師たちには強く惹かれた。彼らは授業の合間に語る雑談の中で、学問の世界の一端を見せてくれた。大学のゼミとはどのような場か、自分が大学で何を研究していたか、そして大学に入ったら

何を読まなければならないか。受験指導よりもそういった話が聞きたくて授業に出席していた。予備校での「教養主義」との邂逅は、学問の世界への憧れを私の中に残していった。そうした意味で、彼らは私にとって「オジさん」だった。

当初は経済学部にて在籍していたが、教育学部に転学部して教育社会学を専攻した。そして現在は、大学受験予備校の文化的側面について主に「教養主義」との関連から研究を進めている。自分を魅了したあの予備校での経験の意味を、学問的に考えてみたくなったのである。こうした個人史的経験や実存的関心を学問的な問いへと昇華させ、鮮やかに解き明かしてくれる教育社会学もまた、私を新たな世界へと連れていってくれた「オジさん」である。しかし、その「オジさん」にそのまま大学院まで連れていかれてしまうことになるとは、実の両親も思っただけではなかったようだ。

## 社会人院生 から

教育方法学講座  
修士課程2年

三井 真吾



## 理論と実践の往還をめざして

私は、小学校教員として公立小学校に10年勤務してきました。保護者や地域の方々と連携したり、子どもが学ぶ姿を見たりしてきた中で、学校教育に潜む課題が見えてきました。その一つに、教育方法の工夫があります。2015年学習指導要領一部改正による「特別の教科 道徳」の新設や、2017年学習指導要領改訂におけるカリキュラムの重点の変更などにより、これまで以上に指導や評価の工夫をすることが求められています。学校教育の大きな転換期のなか、私自身も学び直しをする必要を強く感じ、西岡加名恵先生と石井英真先生がおられる教育方法学講座の門戸を叩きました。

しかし、学び直しの決断をしたのはいいものの、妻子のいる身で修学のために2年間休業することは容易なことではありませんでした。家計のことなどを考えると、あと一步を踏み出すことができません。そんな私に、「たった2年間なんだから大丈夫」「後悔のないように学んでおいで」と背中をおしてくれたのが妻でした。そのおかげでようやく決心がついたように思います。今では、不便をかけ

ているにもかかわらず労を惜みずサポートしてくれる家族の存在が、私の大きな原動力となっています。

さて、社会人院生としての学業生活は非常に充実しています。私は、学校現場の視点のみにとらわれることなく教育という営みを再検討したいという願いから本研究科を志望しました。そして現在、期待以上の環境に大きな喜びを感じると共に、自分の視野の狭さを痛感させられる日々です。ゼミで繰り広げられる自由闊達な議論の中に身を置くと、教育を多角的・多面的に考えるための示唆が得られます。図書館に赴くと不自由なく文献が手に入ります。自主ゼミでは興味関心を同じくする仲間と互いの意見をぶつけ合うことができます。この充実した環境をいかに血肉にするかが、現在の私自身の課題だと考えています。

最後になりましたが、私の学び直しに理解を示してくださった職場の皆さま、全面的に支えてくれている家族、未熟な私に細やかな指導をくださる西岡先生と石井先生に感謝の意を表しまして結びとします。

## 留学生から

教育認知心理学講座  
修士課程2年

李 沐陽



## Simpleになりたい

私が所属している講座にはさまざまな国のバックグラウンドをもった学生がいます。留学生としての私は、言語能力の面でいつもチャレンジしなければいけない状況にいると思います。生活でも研究をするときでも、言いたいことが伝わらぬと感じたり、自分の伝え方が相手を驚かせたりすることがよくあります。(そんなに深刻な話でもなくて、実際にはちょっとした言い間違いや聞き間違いが爆笑を誘うというパターンがいちばん多いですが。)

それはそれで面白いのですが、大事なときに正確にコミュニケーションを行うにはどうしたらいいかということをよく考えさせられます。

認知心理学の観点から考えると、二人のコミュニケーションがうまく成り立つためには以下の4つのイメージができるだけ噛み合っていることが求められます。つまり、「わたしが思うわたし」「わたしが思うあなた」「あなたが思うわたし」「あなたが思うあなた」のそれぞれのイ

メージがうまくまとまっていることが大事なのです。

だから、自分が表現しやすく、受け手も受け取りやすい伝え方をするためには、自分のことも相手のこともよく知っていかなければなりません。シンプルな伝え方をしたいと努力することは、自分を理解し、人を理解し、さまざまな文化を理解することにつながります。

研究のことで言えば、大学で研究している人にとって、研究発表や論文を書くことも日々行うコミュニケーションの重要な一部分です。研究の過程は難しいですね。過程でいろいろ悩み、自分、研究対象、相手をよく知れば知るほど結果は非常にシンプルで伝わりやすくなると感じています。

ですから、私にとってシンプルになるということは、そんなにシンプルではない意義があるのです。だから、シンプルになりたい! Simple is best!

### 附属臨床教育実践研究センターから

## 臨床教育実践研究センターの活動

連携教育学講座教授 臨床教育実践研究センター長 岡野 憲一郎



当センターは、一般市民に開かれた臨床実践としての心理教育相談室での、大学院生や教員による日々の臨床活動をその主たる業務としています。また、学校現場に密着したテーマを現場に還元することを目指し、教師、臨床心理士、精神科医等が交流し思索を深める「リカレント教育講座」、一般市民への教育的啓発を目的とする外国人客員教授による「公開講座」、学校現場での実践を心理・教育的に検討する「現場実践ケースカンファレンス」、東日本大震災被災者に向けた「こころの支援

室」の活動、センター関連の研究成果を収めた「京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要」の発刊など、教育・実践・研究活動を進めています。

昨年度のリカレント教育講座(第21回)は2017年8月20日(日)に開催し、「『心の教育』を考える一家族の理解とその支援」をテーマに、シンポジウムや個別事例の検討を行いました。今年度は、「『心の教育』を考える一教師のメンタルヘルス」をテーマとして8月19日(日)に開催を予定しています。また11月11日(日)には、ルーベン大学のルディ・ベルモット先生をお迎えし、「不可知なもの—ことばによる思考を超える心の機能と心の変化—」と題した公開講座を開催いたします。

東日本大震災に関連して関西に避難、移住して来られている方々への支援を実践しているこころの支援室では、教員、学生が協働し、定期的な支援活動を行っています。2018年2月には「巨大さごろく大会&和(わ)・話(わ)・輪(わ)の会」を院生スタッフ主導のもとに開催し、共通の背景を持つ参加者同士が新たに出会ったり、継続して来られている参加者同士が再会し、近況を伝え合ったりする機会とすることができました。震災から7年以上が経過し、それぞれの世帯の状況も個別化してきていますが、参加者のニーズに合わせ、今後もこのような支援活動を継続してまいります。



昨年秋の公開講座において、クリスチャン・レスラー先生(フライブルグ・カトリック大学、後列中央)と

### 教育実践コラボレーションセンターから

## 学校教育改善プロジェクトの活動

教育・人間科学講座 准教授 石井 英真



学校教育改善プロジェクトの取り組みの一つとして、京都市立高倉小学校と私たち教育方法学研究室との共同研究(プロジェクトTK)が今年度もスタートした。毎年、メンバーの顔合わせもかねて、5月の段階で教員と院生が高倉小学校の校内研修会におじゃまして、教員による講話とワークショップを行っている。今回はパフォーマンス課題(リアルな文脈で知識・技能を総合的に使いこなすことを求める評価課題)を用いた単元のアイデアを出し合うワークショップを実施した。そこでは教員のグループに院生も参加するわけだが、それぞれの院生がどのようにその場に関わっているのかを見るのはおもしろい。積極的に提案を試みて、先生方の納得もえている者、なかなか先生方が腑に落ちる提案ができず苦労している者、また、先生方にとって外部の者

である自分の立ち位置から何を発言すべきかわからず、なかなか意見を言えない者などなど。私自身、現場感覚というか現場の文法のようなものの前に、幾度となく挫折感を味わってきたし、今もそうなので、自分と重ね合わせてしまう。自戒を込めて言うなら、理論を現実には当てはめてものをいうのでは、現実の事象そのものには迫れないし現場の納得も得られない。逆に、現場の先生に納得してもらえる発言ができることはもちろん素晴らしいが、指導的立場に満足してしまえば、現場に対して誠実さを欠く研究者となってしまうかもしれない。院生たちの個性も感じながら、現場と関わる研究者としてどんな経験をし、どう成長していくのか、見守っていきいたいし、自らもまた彼らとともに、現場への関わり方について考えていきたい。

### グローバル教育展開オフィス



グローバル教育展開オフィス 講師 安藤 幸

グローバル教育展開オフィス(以下、オフィス)は、国際的通用性のある新たな「日本型」教育文化・支援モデルの構築及びカリキュラム開発などを目的とし、本研究科の学際教育学研究拠点として、2017年4月に設置されました。2018年2月にオフィスの専任講師として着任して以来、稲垣研究科長のリーダーシップのもと、研究科内外の支援を受けながら、オフィスの運営体制の整備・構築を図っています。

これまで本研究科では、海外の教育・研究機関と活発な教育・研究活動を行ってきました。2017年12月にはハワイ大学マノア校教育学部と、2018年3月にはオックスフォード大学日産日本問題研究所と新たに部局間学術交流協定を締結しました。国際合同授業や国際共同研究など、さらなる連携が期待されます。

また、2018年3月には、タイの京都大学ASEAN拠点、日本学術振興会バンコク研究連絡センター、UNESCOバンコクオフィス、チュラロンコン大学教育学部及びカセサート大学教育学部、さらにはシンガポ

ールの国立教育研究所を訪問し、教育連携の可能性について関係者と協議しました。オフィスの国際教育ランチでは、これらの教育・研究機関ネットワークと協働して、グローバル教育科目(「国際フィールドワーク」及び「国際インターンシップ」)の来年度開講を目指します。

2018年4月12日(木)には新年度のオープニング・レクチャーとして、オックスフォード大学日産日本問題研究所の苅谷剛彦教授をお招きし、「オックスフォードから見たくニッポンの教育」>社会学的アプローチ」と題した講演をしていただきました。参加した修士課程の新入生にとって、教育を研究することについて新しい観点から考えるきっかけになったと思います。今後も、連続講演などオフィス主催のイベントを通して、学際的かつ国際的な視野で教育文化を問い直す機会を提供していきます。

オフィスへの引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。



日本学術振興会バンコク研究センターを訪問



タイ・カセサート大学教育学部を訪問



オフィスの様子

### オックスフォード大学日産日本問題研究所

研究科長 稲垣 恭子

オックスフォード大学日産日本問題研究所(英国)とは、苅谷剛彦教授、ロジャー・グッドマン教授を通して従前から交流がありましたが、この度、本研究科のグローバル教育展開オフィスの始動に伴い、本格的



講演するオックスフォード大学・苅谷剛彦教授

に学術交流を進めるべく2018年2月に学術交流協定を締結しました。

同研究所は、日産自動車株式会社の出資により1981年に設立され、ヨーロッパ有数の現代日本研究の拠点のひとつとして広

く知られています。今回の協定によって研究科との共同研究や若手研究者の派遣・研修などを積極的に進めていきたいと思っています。

協定締結後の4月12日(木)には、本研究科グローバル教育展開オフィス主催「レクチャー・シリーズ」第1回として、同研究所教授苅谷剛彦教授による特別講演「オックスフォードから見たくニッポンの教育」>社会学的アプローチ」を開催しました。本研究科の教員及び学生のほか、学内外からの参加者も含め約70名が参加し、教育を研究することについての考え方やアプローチについて活発な意見交換が行われました。

今後は、合同シンポジウムの開催、若手研究者(ポスドク等)の研究派遣等を予定しており、より一層の学術交流を推進していきたいと思

# Partnership with University of Hawaii, College of Education: Learning to 'Read the Global', Together

教育・人間科学講座 准教授 Jeremy Rappleye



In December 2016, a group from Kyoto University, Graduate School of Education (KU-GSE) led by Dean Inagaki Kyoko visited the University of Hawaii, College of Education (UH-CE) to establish a formal institutional partnership. Beginning with joint lectures co-taught by KU-GSE and UH-CE faculty, the intent is to grow the relationship in coming years to include substantive student exchange, short-term internships, and research collaboration. The reception the KU-GSE group received at UH-CE was far beyond what the KU side anticipated, making it clear that UH-CE was enthusiastic about partnering with the Graduate School of Education. In the words of one participant from Hawaii in the official MOU Signing Ceremony: "in fact, we had sought many times to establish partnership with Kyoto University's Graduate School of Education over the past two decades but never had much luck. It is an honor for our school to be partnered with such a prestigious research institution."

From the KU side, why Hawaii? First, in our search for a partnership with a North American institution, it became clear that few institutions there are still interested in East Asia, particularly Japan. In a telling contrast from the 1980s, most colleges of education in the United States are now overwhelmingly focused on quantitative methods, policy-relevant research, technological 'solutions', and restricted by sources of funding from going deeper into the cultural, historical, and theoretical dimensions of education – the bedrock of any cross-cultural exchange that KU-GSE would hope to pursue. Programs at leading universities on the west coast of the United States such as Stanford and UCLA, for example, did not replace their scholars and specialists of East Asian education active in the 1980s-1990s (e.g. Thomas Rohlen, John Hawkins). Meanwhile, new programs in universities such as the University of Oregon (e.g., Yong Zhao), and older institutions such as Columbia, Harvard, and Madison-Wisconsin have turned to focus almost exclusively on China in recent years. UH-CE has, however, remained interested and engaged with Japan: professors in the department frequently come

to Japan for research and lectures, many of the most distinguished Japanese specialists still maintain contacts with the department, and nearly everyone we spoke was connected personally to Japan in some way or another.

Second, the work at UH-CE is complemented and supported by fascinating work being done in other areas of the university. The East-West Center (formally established by the US Congress in 1960 as the Center for Cultural and Technical Interchange Between East and West), remains one of the foremost centers of exchange and research in the United States linking to East Asia. Many of the East-West fellows have written on Japanese education (e.g., Deane Neubauer, Peter Hershock) and continue to facilitate exchanges with Japanese scholars. At the same time, the UH Philosophy Department has long been one of the world's leading centers for comparative philosophy. In fact, Professor Charles A. Moore at UH set up the East-West Philosopher's Conferences (1939, 1949, 1959, 1964, and continuing through today), a forum that once brought Japan's leading philosophers into dialogue with the wider World (e.g., see *The Japanese Mind: Essentials of Japanese Philosophy and Culture*, 1967 with contributions by DT Suzuki, Nakamura Hajime and others). Unfortunately, much of this exchange has atrophied in recent years, but we seek – through this partnership – to help rebuild it, but this time placing a particular focus on education, schooling, and learning. That such work is both possible and urgent is well captured in the recent UH publication entitled *Educations and Their Purposes: A Conversations Among Cultures* (edited by Ames & Hershock, 2008). This attention to plurality, dialogue, and culture is disappointingly rare in triumphant post-Cold War United States, particularly in the field of education.

What will KU-GSE students learn? The partnership we envisage on the KU-GSE side will seek to provide a space where KU-GSE students from every specialization (koza) can learn how to 'read the global', a term popularized in the field of comparative education by Robert Cowen. It signifies the need for students to match theoretical and empirical studies with a developed and nuanced reading of the wider World, particularly its historical, sociological, epistemic, and even ontological foundations. Given that mainstream educational research worldwide, but particularly in Japan, has to date largely remained focused on domestic concerns, this larger backdrop is often missing from the repertoire of contemporary graduate students. But without the ability to 'read the global' – the ability to situate oneself, one's research object, and one's research output against a larger global landscape – it is unlikely that students can successfully 'go global' in their careers. Their work, no matter how rigorous, is at danger or remaining framed in domestic concerns that generate little international interest outside a small coterie of Japan specialists. Hawaii represents a microcosm where one can view a



series of tides and trends in education that occurred virtually worldwide but not as strongly in Japan (e.g., protestant missionaries, plantation capitalism, Western colonization and civilizing mission, as well as discourses of multiculturalism and multilingualism), hopefully allowing KU-GSE students to learn how to position their work, connect, respond, and continue rethinking the research agenda for a 'global age' (see Rappleye 2018).

We plan to take the first group of KU-GSE students to UH-CE this coming February on a 'trial run'. From the next academic year, the annual intensive course conducted UH-CE and team taught with standout UH Associate Professor Brent Edwards, will be a credit-earning course. We also seek to open the course to students from other institutional partners of KU-GSE (IOE, Beijing Normal, Dortmund), forming a global consortium of sorts. From this foundation, we will seek joint research projects, ideally those that extend the number of disciplines involved in the exchange far beyond philosophy, sociology, and comparative education. We hope that the UH-CE partnership will result in a strong, lasting partnership that helps all of us 'read the global' together, that is: in ways that



leave behind the national borders and disciplinary walls that continue to structure the contemporary research imagination; those leaving us stuck in the past, uni-disciplinary, and unconnected.

## ドイツ・ドルトムント工科大学インターンシップ

臨床教育学講座 博士後期課程3年 高倉 美帆



私は、2018年2月5日―14日の約8日間、2016年より京都大学教育学研究科と学術交流協定を結んでいるドイツ・ドルトムント工科大学(教育・社会・心理学部)ヘインターンシップ(TA)として派遣されました。今回は初めての試みということもあり、講義内容の共有や方向性などの意見交換や打ち合わせを事前に行い、また現地でも入念な打ち合わせが繰り返されました。そのなかでは開催される講義の内容の共有だけに限らず、日本とドイツとの教育制度(単位取得や博士学位授与等)の違いや、院生の生活スタイルの違い等までも共有、理解することができました。そして、「Bildung and Transculturality」というテーマで行われた集中講義においては、現地の院生によるさまざまな視点(歴史やジェンダー等)からのプレゼンテーション、そして一つの論稿を全員で議論するという大変有意義な時間で、そこで議論された関心は現代における「教育」が抱える問題点を浮き彫りにするにとどまらず、どの社会においても通底している普遍的な問題点そのものでもありました。だ

からこそ、このインターンシップが終わってもなお、自己の関心と重なるところを、自国で考えたその先に異なる文化圏において共有すること、さらには、異なる文化圏において、それぞれが母国語ではなく第二言語で対話するということの困難さと重要性を、肌で感じることができた数日間だったように思っています。また、院生同士の交流を通じて、自国の歴史を含めた研究関心を話し合えるこのような貴重な機会は、浅薄なままのグローバル化を見直す契機となると思いました。この協定によるプログラムが、学生、院生、研究者の垣根を越えて今後ますます発展いたしますよう、心より祈念しております。

最後に、滞在やインターンシップにあたって心強いサポートをくださったRuprecht Mattig教授、Zhebe Klaus氏、また、このような機会を与えてくださった西平直教授、山名淳准教授(現・東京大学大学院教育学研究科 教授)、また些細なところまでご配慮いただいたグローバル教育展開オフィスの門田直美さんに、心より感謝申し上げます。



## 若手研究者出版助成事業

教育学研究科では、京都大学総長裁量経費を得て、優秀な若手研究者による博士論文の出版助成事業を行っております。本制度を利用して昨年度は8件採択されましたので、ご紹介します。

氏名	修了年月日・現職	タイトル	出版社(予定)
田附 紘平	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成29年3月修了 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 講師	二者関係のこころ —心理療法と愛着理論の接点—	京都大学学術出版会
工藤 瞳	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成28年11月修了 専修大学・早稲田大学 非常勤講師	ペルーの民衆教育： 「社会を変える」教育の変容と学校での受容	東信堂
大下 卓司	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成28年7月修了 神戸松蔭女子学院大学人間科学部 准教授	20世紀初頭のイギリスにおける 数学教育改造運動	東洋館出版社
千葉 友里香	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成29年3月修了 京都大学大学院教育学研究科 臨床教育実践研究センター 特定助教	箱庭療法と心の変容 —イメージと関係性の視点から—	創元社
西尾 ゆう子	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成29年3月修了 株式会社北大阪メンタルヘルス 渡辺カウンセリングルーム 心理士	老年期女性の心的世界 「枯れない心」に寄り添う	誠信書房
山本 はるか	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成28年3月修了 大阪成蹊大学教育学部 講師	アメリカの言語教育 —多文化性の尊重と学力保障の両立を求めて—	京都大学学術出版会
大山 牧子	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成29年3月修了 大阪大学全学教育推進機構 助教	大学教育における教員の省察 —持続可能な教授活動改善の理論と実践—	ナカニシヤ出版
時岡 良太	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成29年9月修了 滋賀大学保健管理センター カウンセラー 京都外国語大学学生相談室 カウンセラー 京都桂病院心理相談室 臨床心理士	「自分」とは何か —日常語による心理臨床学的探究の試み—	創元社

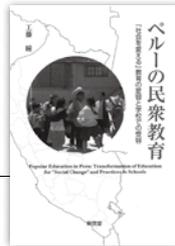


## 二者関係のこころ —心理療法と愛着理論の接点—

田附 紘平

心理療法におけるクライアントとセラピストの二者関係では、一体どのようなことが起こっていて、どのようなことが体験されているのでしょうか。多くの要素が複雑に絡み合う関係性を読み解くことは非常に困難ですが、その関係性が心理療法の展開を支えているのであり、そこにクライアントの心理的特徴が大きく反映されています。

本書は、そうした二者の関係における体験の様相を、愛着理論を手がかりに解き明かそうと試みています。愛着とは、乳幼児が苦痛を感じた際に、安全であるという感覚を得るために養育者に近づこうとする本能的な性質を指します。本書では、愛着理論の歴史の変遷や愛着理論の視点をういた心理療法に関する研究を概観したうえで、クライアントの体験について主に調査研究をもとに多角的に検討しています。本書が、心理療法はもちろん対人援助の実践に携わっておられる方など、人と人の関わり合いに関心がある方に少しでもお役に立てることがありましたら誠に幸いです。



## ペルーの民衆教育： 「社会を変える」教育の変容と学校での受容

工藤 瞳

ラテンアメリカの民衆教育は、エリート主義的で既存の社会構造を温存する伝統的な教育制度への批判として生まれた。それは、農民や都市周辺部の住民等の社会的に不利な状況にある人々が不平等な社会を批判的に捉え、社会を変革するための教育、その主体を育成するための教育である。この「民衆」には、貧しい人々、社会的・政治的・経済的に支配された状況にある人々というニュアンスがある。

しかし社会を変えようと言っても、ラテンアメリカの広義の民衆教育が生まれた19世紀末からも、ブラジルの教育学者パウロ・フレイレの貢献を受けた狭義の民衆教育が生まれた1960年代からも、社会自体が変化している。特に1980年代以降、ラテンアメリカ各国は民主化や経済発展を経験し、誰が民衆なのか、先住民などの文化的多様性は考慮されるのか問い直されてきた。

本書は、ラテンアメリカの民衆教育が特に1980年代以降の社会の変容を受けてどのように変容したのか、変容してもなお「社会を変える」ことを訴える現代的意味とは何かを、ペルーを中心に考察したものである。



## 20世紀初頭のイギリスにおける 数学教育改造運動

大下 卓司

拙著は、20世紀初頭にイギリスで勃発した数学教育改造運動を通じて、中等教育で数学を学ぶ普遍的な意義を模索した研究です。具体的、実用的な内容が指導されることが多い初等教育の算数に対し、中等教育の数学は、抽象的で、役に立たないと考えられ、教科内容の削減が行われた時代もありました。中等教育で数学を学ぶ意義とは何でしょうか。

数学教育史において、中等教育で数学を学ぶ意義について初めて問われたのが、数学教育改造運動です。この運動は、イギリスの工学者ペリー (Perry, J.) が、1901年の講演「数学の教育」で、教養のためだけでなく、科学の基礎のために数学は学ばれるべきであり、そのためカリキュラムや教育方法の転換が必要であると主張したことを機に巻き起こりました。この議論は、イギリスのみならず、同様に数学教育改革の機運が高まっていた欧米諸国、そして日本を巻き込んで国際的な教育改革運動へと発展しました。数学教育のあり方そのものが問われた当時の論争が、今後の数学教育の方向性を模索する一助となれば幸いです。



## 箱庭療法と心の変容 —イメージと関係性の視点から—

千葉 友里香

箱庭療法とは心理療法の手法のひとつであり、1965年に河合隼雄によって日本に導入され、そののち様々な臨床現場において広がりを見せた。心理療法に来談したクライアントが、砂の入った箱のなかで、山を作ったりミニチュアを置いたり自由で表現をしていく方法であるが、一見子どもの遊びにも見えるような箱庭療法が、なぜ心理療法として成り立ち、クライアントの心の変容へとつながるのかということについて、本書は迫っている。

本書は平成28年度に提出した博士論文をもとに執筆したものであるが、箱庭を制作した作り手のさまざまな語りとそこでのこころの動きを取り上げ、心理臨床学的視点から論じている。特に、箱庭制作によって生じてくるイメージや、そのイメージと作り手という主体との関係性に焦点を当て、箱庭と作り手とがいかに関わり合いながら、作り手のこころの変容へと結びついているのかについて、明らかにしている。これまで発展してきた箱庭療法の心理療法としての意味を、いま一度実証的な視点から提示できれば幸いです。



## 老年期女性の心的世界 「枯れない心」に寄り添う

西尾 ゆう子

この本の特色は「個」としての「生」、「女性」としての「性」に光をあてて「女性の老い」を探究していることです。

「死にたい」と「生きたい」のはざまに揺れるとき、「生きがい」と感じられることは何でしょうか。死ぬのはこわいけれど怖くないと思えるのは、どのようなときでしょうか。これまで、年を重ねた女性は「(誰かの)おばあさん」や「(誰かの)お母さん」、あるいは単なる「老人」としてとらえられることが一般的でしたが、心理的援助の現場では、先入観にとらわれず「生」「性」の主体であるひとりひとりのこころの真実に添うことが必要です。60～90代の女性約60名の協力を得て、臨床心理学の手法を用いて見いだされた「心的世界」は、実に生き生きとしたものでした。からだの生殖機能は終了しても、イメージの次元ではみずみずしい性愛のこころ。人生を語りなおす時、五感から活性化され紡ぎなおされるライフ・ヒストリー。世界でも類まれな超高齢社会を達成した日本の女性は、人類がかつて体験したことがない、それぞれの「老い」を生きているのです。



## アメリカの言語教育 —多文化性の尊重と学力保障の両立を求めて—

山本 はるか

子どもたちに身につけてほしい言葉の学力とは、どのようなものなのでしょうか。何を聞き・話し・読み・書くことで、言葉の学力が獲得されていると考えられるのでしょうか。

本書は、多文化尊重を求めるアメリカのなかで進展している、言葉の学力保障に関する理論と実践に光を当てるものです。1950年代以降のアメリカでは、一人ひとりの持つ「文化」という個性を尊重する教育を獲得するための闘いが営まれてきました。しかしながら、多文化の尊重が学力の低下を招いているとの批判も行われ、読み書きに関する学力保障が課題として考えられてきました。では、「多文化性の尊重」とは、現状を肯定し、個人への介入を避ける行為なのでしょうか。「学力保障」とは、共通の教育目標の到達のために、多様性を排除する行為なのでしょうか。本書はこれらの問いに答えながら、子どもたちに身につけてほしい言葉の学力を探ることをめざしました。日本の国語科教育における内容選択につながる議論となれば幸いです。



## 大学教育における 教員の省察 —持続可能な教授活動改善の理論と実践—

大山 牧子

大学教育の改革は、2008年のFDの義務化を発端に加速を始め、FDという言葉も大学の中では市民権を得ることとなった。各大学は新しい授業方法や評価方法など、多岐に渡るFDプログラムを提供している。ただし、大学教員はどれほど教授活動に関する知識をそこから得たとしても、授業ではたった一人て改善を繰り返し行わなければならない。本書の中心的なテーマである省察は、授業について、教員がその改善の方策を生成するために、自分自身を対象にして熟考するアプローチであり、専門性や個性が高い大学教育において、非常に有用であると考えられる。

本書は、目まぐるしく状況が変化する大学教育において、教員が授業を持続的に改善するための省察の手立てについて、理論と実践の両側面から教育工学的にアプローチする。省察を単なるふりかえりではなく、深く熟考して次の指針を得るための思考パターンとして示すために、省察の観点、支援環境やツールについて紹介し、モデル化を試みる。持続的に授業の改善を繰り返す大学教員の方々に手にとっていただくと幸いである。



## 「自分」とは何か —日常語による心理臨床学的探究の試み—

時岡 良太

「自分」という日常語は、心理療法に深くかかわる言葉であり、「『自分』とは何か」という問いは、心理臨床学にとって根本的な問いであると言えよう。本書の第1部では、日本語としての「自分」に着目し、西洋の概念とは異なる独自の特徴をあぶりだすことを試みました。そのために、「自我」「自己」「アイデンティティ」などの西洋の心理学的概念との比較や、心理療法場面でもしばしば聞かれる「自分らしさ」「自分がない」についての調査研究を通じた考察を行いました。そして第2部では、第1部で浮き彫りとなった「自分」の特徴を踏まえつつ、現代の心理臨床学的課題に対する心理臨床学的探究を試みました。そのアプローチとして、平野啓一郎の小説に登場する「分人」を手掛かりとした考察や、オンラインゲームなどの仮想空間における「自分」について考察しました。「自分」とは非常に二律背反的で捉えがたく、本書が明らかにできたのはその一端でしかありませんが、僅かでも心理臨床に携わる方々に貢献することができれば幸いです。

# 諸記録

## 主な出来事(H29.11.1-H30.3.31)

- 11月
- 1日(水) Rachel Dryer上級講師講演会  
教育学部本館
- 17日(金) 高大連携:高校生向け特別授業「図書館の歴史と多様性」  
(対象:滋賀県立膳所高等学校生)
- 23日(木) 附属臨床教育実践研究センター  
公開講座  
「ユング心理学と今日の科学的知見—夢、元型、コンプレックス、そして心理療法の効果」  
芝蘭会館
- 30日(木) Valérie Camos教授講演会  
「Loss and Reconstruction in Working Memory ワーキングメモリの消失と再構成」  
総合研究2号館
- 12月
- 1日(金) 滋賀県立膳所高等学校 特別授業「記憶について」  
教育学部本館
- 16日(土) E.FORUM 第2回フォローアップ研修  
総合研究2号館
- 21日(木) 教育実践コラボレーション・センター  
第24回知的コラボの会  
「教育・学習データの利活用における国内外の研究動向と課題」  
教育学部本館
- 1月
- 21日(日) ミニ・シンポジウム「スポーツ・メディア研究のデザインをめぐって」  
教育学部本館
- 28日(日) こころの支援室  
「巨大すざろく大会&和・話・輪の会」  
総合研究1号館
- 2月
- 17日(土) 教育実践コラボレーション・センター  
野童いなか塾(第15回)「減災懇話会～水害に備える～」  
野殿・童仙房生涯学習センター(旧小学校)
- 3月
- 3日(土) 教育実践コラボレーション・センター  
公開シンポジウム「現代社会に求められる新たな秩序を考える」  
芝蘭会館
- 6日(火) グローバル教育展開オフィス  
講演会  
「教育研究における質的方法の可能性と限界  
Possibilities and limitations of qualitative methods in 'Bildungsforschung」  
教育学部本館
- 16日(金) スプリングデザインスクール/第6回 産学連携型認知デザインワークショップ  
「仕事を通じた成長を思い描こう:人材育成のためのデザイン」  
百周年時計台記念館
- 18日(日) 皆藤章教授 最終講義「臨床家であること」  
百周年時計台記念館

## ハラスメント防止に関する研修会

本研究科・学部では、教職員及び学生等の人権、特にハラスメントの認識をより深め、「ひと」としての人格や尊厳を高めハラスメントの防止を図ること、さらに就労上又は修学上の適正な環境を築くため、毎年、研修会を開催しています。

平成29年度は、平成30年2月15日(木)に開催し、京都大学学生総合支援センター カウンセリングセンター准教授の村上嘉津子先生による講演が第1会議室であり、教員、事務職員の22名の参加を得て、意識を高める機会となりました。

# 諸記録

## 平成30年度入試結果

### ◎教育学部

日程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	文系	45	158	153	45	56
	理系	10	41	39	11	
特色入試		6	23	23	5	5
学士入学(第3年次編入学)		10	20(1)	20(1)	6(1)	6(1)

※前期日程の募集人員は、特色入試において最終的な入学手続者数が募集人員に満たなかったため、残余の募集人員を加えたもの。

( )内の数は外国人留学生で内数

### ◎教育学研究科

課程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	
教育学環専攻	修士課程	研究者養成プログラム	37	86(22)	85(22)	45(11)	44(11)
		教育実践指導者養成プログラム	5	6	6	3	3
	博士後期課程	研究者養成プログラム	若干名	14(3)	14(3)	1	1
		教育実践指導者養成プログラム	4	2	2	2	2

( )内の数は外国人留学生で内数

## 平成29年度学位授与件数

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	71
修士	教育科学専攻	31
	臨床教育学専攻	5
博士	課程博士	19
	論文博士	3

## 平成29年度教育職員免許状取得状況

中学校専修免許状	3
中学校1種免許状	0
高等学校専修免許状	6
高等学校1種免許状	1
特別支援学校1種免許状	0

## 外部資金受入れ(H29・H30年度)

### ◎共同研究

研究題目	委託者	担当者
筆圧とストレスに関する研究	株式会社ワコム	野村 理朗
心的・生理的状态とその制御が生理・知覚・認知・情動応答に与える影響についての研究	日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所	野村 理朗

### ◎受託研究

研究題目	委託者	担当者
「活力ある生涯のためのLast 5Xイノベーション」拠点 妊産婦・母子サポート・あかちゃんと親に対する育児サポート	国立研究開発法人 科学技術振興機構	明和 政子

### ◎寄付金

研究題目	寄附者	担当者
京都大学シリーズ『教職教養講座 全15巻』出版研究のため 教育学研究科	協同出版株式会社	矢野 智司 西平 直 西岡 加名恵 他
「NHK朝の連続テレビ小説における女性の表象と生き方モデルー調査研究に基づく映像教材の作成ー」	公益財団法人放送文化基金	稲垣 恭子

## 科学研究費補助金(平成30年度)

事業名	研究課題名	氏名
基盤研究(A)	Understanding, measuring, and promoting crucial 21st century skills: Global communication, deep learning, and critical thinking competencies	Manalo Emmanuel
基盤研究(A)	身体的表象から自他分離表象にいたる発達プロセスの解明	明和 政子
基盤研究(B)	戦後東アジア諸地域における教育の比較史的分析—冷戦と植民地主義に着目して—	駒込 武
基盤研究(B)	21世紀型コンピテンシー育成のためのカリキュラムと評価の開発	矢野 智司
基盤研究(B)	なつかしさ感情の機能と個人差: 認知・神経基盤の解明と応用	楠見 孝
基盤研究(B)	戦後日本における政治家・財界人の教育観に関する教育社会学的研究	稲垣 恭子
基盤研究(B)	後発国における大学院教育及び学位制度の導入と変容に関する比較研究	南部 広孝
基盤研究(B)	パフォーマンス評価を活かしたカリキュラム・マネジメントの改善方略の開発	西岡 加名恵
基盤研究(B)	ゼロ年代以後の教育歴とライフコースの変化に関するパネル調査研究	岩井 八郎
基盤研究(B)	養育行動が幼児の実行機能を媒介して社会的行動に寄与する過程の発達認知神経科学研究	森口 佑介
基盤研究(C)	ケアとスピリチュアリティの教育人間学的解明-女性宗教者への聞き取り調査を中心に	西平 直
基盤研究(C)	音韻的作動記憶における系列情報保持を支える時間構造の長期知識	齊藤 智
基盤研究(C)	資質・能力を育てる授業デザインと教師の力量形成に関する開発研究	石井 英真
基盤研究(C)	新しい数学基礎教育のための Precalculus 教科書作成	藤本 一郎
基盤研究(C)	心理アセスメントにおけるスーパービジョンシステムの構築	高橋 靖恵
基盤研究(C)	<哲学の女性性>とアメリカ哲学のグローバルな再生: 政治教育の実践哲学研究	齋藤 直子
基盤研究(C)	教師力(タクト)熟達の日独比較—学校日常の緊急性・不確実性対処に関する実証研究	鈴木 晶子
基盤研究(C)	森有礼文部大臣時代の教育政策に関する総合的研究—「森文政」期像の再構築—	田中 智子
基盤研究(C)	国際博覧会条約(1928年)及び博覧会国際事務局(1931年)の成立に関する研究	佐野 真由子
基盤研究(C)	大正・昭和初期都市新中間層における理想の人間像の形成と変容	竹内 里政
基盤研究(C)	教育成果の質的測定を活用した教員・学校・教委連携型教育改善システムの開発的研究	服部 憲児
基盤研究(C)	非英語圏トランスナショナル高等教育の展開に関する国際比較研究	杉本 均
基盤研究(C)特設	紛争の発生とその緩和に関わる人間本性の理解 —心理・神経・遺伝学的研究—	野村 理朗
挑戦的萌芽研究	「夢の構造分析」に関する発達の・比較文化的・心理臨床的研究	田中 康裕
挑戦的萌芽研究	文化装置としての「師弟関係」に関する歴史社会学的研究	稲垣 恭子
挑戦的萌芽研究	誤報記事と新聞批判のメディア史的研究	佐藤 卓己
挑戦的萌芽研究	評定尺度法に対する回答の個人差と集団差を同時補正するための新たな方法の開発と評価	高橋 雄介
挑戦的研究(萌芽)	子供の直観像に関する発達認知神経科学的研究	森口 佑介
若手研究(B)	宗教を取り入れた道徳教育による人間形成の理論と実践に関する研究	広瀬 悠三
若手研究(B)	近世教育メディア史における「無料」の価値—「施印」に着目して	ファンステーンバルニールス
若手研究(B)	Is An Alternative Concept of Learning Driving East Asian Academic Achievement? Comparisons of PISA Performance with Implications for Policy Reforms	Rappleye Jeremy
若手研究	Round Studyの有効性の検証と評価シートの開発・効果検討	黒田 真由美
若手研究	図書館の社会的責任に関する戦後史研究	福井 佑介
新学術領域研究(研究領域提案型)	オープン・データを活用した思春期・青年期・成人期早期における主体価値の諸相の解明	高橋 雄介
研究活動スタート支援	高大接続における制度構築の可能性と課題—米国のAPIに注目して—	郭 暁博

## 厚生労働科学研究費補助金(平成30年度)

研究課題名	氏名
HIV陽性者に対する精神・心理的支援方策および連携体制構築に資する研究	大山 泰宏

# 諸記録

## 人事異動(H29.11.1-H30.4.30)

平成29年11月1日付け

**GOTZ, Patrik** 研究員(教育方法学) 採用

平成29年11月30日付け

**BUTLER, David** 特定助教(教育方法学) 退職

平成29年12月1日付け

事務補佐員(教育社会学) 採用

平成29年12月31日付け

事務補佐員(教育社会学) 任期満了

平成30年1月1日付け

事務補佐員(教育社会学) 採用

平成30年1月16日付け

技術補佐員(教育認知心理学) 採用

平成30年1月31日付け

技術補佐員(教育認知心理学) 任期満了

平成30年2月1日付け

**安藤 幸** 講師(グローバル教育展開オフィス) 採用

平成30年3月31日付け

**皆藤 章** 教授(臨床実践指導学) 退職

**米田 英嗣** 特定准教授(白眉センター) 退職

**野崎 優樹** 特定講師(教育認知心理学 デザイン学) 退職

**渡辺 雅幸** 特定講師(地域連携教育研究推進ユニット)

任期満了

**朱 燁** 助教(臨床教育学) 任期満了

**種村 文孝** 助教(生涯教育学) 任期満了

**橋本 敦史** 助教(情報関連) 任期満了

**郭 暁博** 特定助教(地域連携教育研究推進ユニット)

任期満了

**田附 紘平** 特定助教(心理臨床学) 退職

**皆本 麻実** 特定助教(心理臨床学) 任期満了

**眞継 芳春** 事務長 定年退職

事務補佐員(地域連携教育研究推進ユニット)

任期満了

**荻原 祐二** 研究員(教育認知心理学) 任期満了

**黒田 真由美** 研究員(心理臨床学) 任期満了

**小林 伸行** 研究員(教育実践コラボレーション・センター)

任期満了

**田中 哲平** 研究員(研究科付) 任期満了

**辻 喜代司** 研究員(教育実践コラボレーション・センター)

任期満了

平成30年4月1日付け

**西岡 加名恵** 教授  
現代教育基礎学系長(任期30.4.1-31.3.31)

**齋藤 智** 教授  
教育心理学系長(任期30.4.1-31.3.31)

**南部 広孝** 教授  
相関教育システム論系長(任期30.4.1-31.3.31)

**竹内 里欧** 准教授  
国際高等教育院へ配置換(大学院教育学研究科併任)

**齋藤 直子** 准教授 国際高等教育院より配置換

**高橋 靖恵** 教授(臨床心理学) 昇任

**佐野 真由子** 教授(教育社会学) 採用

**郭 暁博** 助教(教育研究関連) 採用

**久富 望** 助教(情報関連) 採用

**椎名 健人** 助教(教育社会学) 採用

**花田 史彦** 助教(教育社会学) 採用

**鈴木 優佳** 特定助教(臨床心理学) 採用

**田中 友香理** 特定助教(教育・人間科学) 採用

**小西 博之** 事務長 総務部広報課課長補佐より配置換

**飯田 智子** 掛長(図書掛)

附属図書館学術支援課資料整備掛長へ配置換

**吉田 弘子** 掛長(図書掛)

人文科学研究所図書掛長図書より配置換

**鍛冶 美幸** 研究員(臨床心理学) 採用

**朱 燁** 研究員(教育・人間科学) 採用

**全 京和** 研究員(地域連携教育研究推進ユニット) 採用

**高見 茂** 研究員(地域連携教育研究推進ユニット) 採用

**長谷 綾子** 研究員(臨床心理学) 採用

技術補佐員(研究科付) 採用

事務補佐員(地域連携教育研究推進ユニット) 採用

事務補佐員(教育社会学) 採用

平成30年4月16日付け

**DIAZ ROJAS, Francoise**  
研究員(教育・人間科学) 採用

## 教員寄贈図書

寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
岡邊 健	犯罪学リテラシー = Understanding criminology	法律文化社	2017
教育認知心理学講座	教育学研究科開設科目授業成果報告書：京都大学デザイン学大学院連携プログラム；平成28年度	楠見孝	2017
田中 耕治	戦後日本教育方法論史 = Educational methods theories in postwar Japan；上, 下 (全2冊)	ミネルヴァ書房	2017
南部 広孝	中国における高等教育修了学歴の取得ルートの多様化に関する研究(平成13年度～平成14年度科学研究費補助金(若手研究(B))研究成果報告書)	南部広孝	2003
南部 広孝	大学入学資格は誰に与えられたか? : わが国における大学入学資格の変遷に関する研究(長崎大学平成16年度大学高度化推進経費(学長裁量経費)研究プロジェクト研究成果報告書)	南部広孝	2006
南部 広孝	中国高等教育における入学者選抜方法の多様化に関する研究(平成16年度～平成18年度科学研究費補助金(若手研究(B))研究成果報告書)	南部広孝	2007
南部 広孝	中国の大学入学者選抜における「自主招生」の現状：資料集(平成19年度～平成21年度科学研究費補助金(基礎研究(C))平成19年度中間報告書)	南部広孝, 楠山研	2008
南部 広孝	アジアの「体制移行国」における高等教育制度の変容に関する比較研究；中間報告書 [1], 2, 3, 最終報告書(平成25-28年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書) (全4冊)	南部広孝	2015-2017
西岡 加名恵	教育をよみとく：教育学的探究のすすめ	有斐閣	2017
ニールス・ファンステンパール	〈孝子〉という表象：近世日本道徳文化史の試み	べりかん社	2017
溝上 慎一	アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性(学びと成長の講話シリーズ；第1巻)	東信堂	2018
溝上 慎一	高大接続の本質：「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題(どんな高校生が大学、社会で成長するのか？2)	学事出版	2018
山名 淳	災害と厄災の記憶を伝える：教育学は何ができるのか	勁草書房	2017
渡邊 洋子	専門職教育者のIPE(異業種連携教育)基盤型研修プログラムの実践開発研究：研究成果報告書(平成26年度～28年度科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究))	「専門職教育者のIPE(異業種連携教育)基盤型研修プログラムの実践開発研究」科研報告書編集委員会	2017
渡邊 洋子	「京都の地域リソース実践学」：事業報告書；2016年度	京都大学教育学部COC事業「京都の地域リソース実践学」事務局	2017

受入期間：2017/4/1～2018/3/31 寄贈者氏名順(敬称略)

教育学研究科・教育学部図書室にいただいた寄贈者著作のみの掲載です。今後とも蔵書充実のためにご寄贈くださいますようお願いいたします。

## 教育学研究科・教育学部基金

ご寄付いただきました方々への感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。(公開をご希望されない方については、掲載しておりません。)

伊藤 大介	藤田 裕之
上中 良子	前橋 由紀子
金山 靖道	松本 嘉一
木下 健一	宮本 忠治
齋藤 堯仁	
砂川 和敏	
高橋 登	
辻村 政雄	
手嶋 康	
芳我 明彦	
長谷川 保宏	

(五十音順)

平成30年5月31日現在

### —未来の教育を創造するため、人間・社会についての世界最先端の研究を展開し、成果の社会還元を行うとともに、学生の教育環境の整備に取り組みます—

本研究科・学部は、1949年の創設以来、世界最先端の教育学研究とその研究者の養成、ならびに全学の教職教育の責任部局という責務を担いながら、これまで各界で活躍する有為な人材を輩出し、優れた研究成果を現場に還元することで社会の要請に答えてきました。

本研究科・学部は、学校教育はもとより、地域、家庭、職場などが育っていくあらゆる場を「人間形成」の場として探究しています。その中で、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域の地域振興などへの提言、教育委員会の指導主事など第一線の実践現場で働く人びととしての研修の機会を提供しておりますが、このような活動は、大学院生が現場のリアルな問題に触れながら自らの研究関心と手法を研ぎすますための教育の場でもあります。

近年、社会と連携したこうした教育研究活動の必要性が増す状況において、本研究科・学部が社会と連携しながら実践的な教育・研究を行うためには、安定した財政基盤が必要です。その礎の一つとして、2015年に「教育学研究科・教育学部基金」を設立しました。本基金では、研究の成果

を現場(フィールド)に返し、また現場での課題を教育・研究に生かしていく、「理論と実践の往還型」の教育・研究という本研究科・学部の特色ある活動を維持するため、以下の活動に活用します。

#### 基金の使途：

項目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣 など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催 など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修士生・卒業生との連携活動 など

詳細は以下のとおり

<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html>

新任教員・事務職員紹介



佐野 真由子  
教授

研究科にとって新しい、文化政策学分野の形成に携わらせていただきますこと、身の引き締まる思いです。なにとぞよろしく願い申し上げます。

所 属 教育社会学講座  
専 門 文化政策学、文化交流史



安藤 幸  
講師

主な研究テーマは、移民の心理社会的適応です。グローバル教育展開オフィスを通し、国際的な教育・研究の環境づくりに尽力いたします。

所 属 グローバル教育展開オフィス  
専 門 ソーシャルワーク



郭 暁博  
助教

4月に着任いたしました。これまでに教育学研究科で勉強してきたことを、教育・研究に精一杯取り込んでいきたいと思っています。

所 属 教育学研究科(教育研究関連)  
専 門 教育行政学



久富 望  
助教

情報基盤の安定運用のため着実な業務を心がける一方、多分野にわたる学修と教育現場での経験を生かし面白い研究を目指します。

所 属 教育学研究科(情報関連)  
専 門 統計科学、教育工学



椎名 健人  
助教

明治30年代から昭和初期にかけての日本における文学者の社会的ネットワークについて研究しています。宜しくお願いいたします。

所 属 教育社会学講座  
専 門 文化社会学、文学社会学



花田 史彦  
助教

映画評論家を素材として、映画というマスメディアに仮託された「知」の歴史を研究しています。どうぞよろしく願い申し上げます。

所 属 教育社会学講座  
専 門 歴史社会学、メディア史



鈴木 優佳  
特定助教

これまで学んできた教育学研究科に教員として携われることに感謝します。臨床実践、研究、教育活動に励んでいきたいと思っています。

所 属 臨床心理学講座  
専 門 臨床心理学



田中 友香理  
特定助教

養育者・乳児間の社会的相互作用に関する研究を行っています。教え・学びながら研究に精進いたします。よろしく願いいたします。

所 属 教育・人間科学講座  
専 門 発達科学、発達心理学



小西 博之 事務長

4月から本研究科において勤務させていただくことになりました。教育・研究の推進に寄与できるよう努力したく、お気軽に声をかけていただければと思います。よろしく願いいたします。

吉田 弘子 掛長

「こんにちは」と挨拶して入庫する学生さんが多く、嬉しいです。皆様のお役に立てるよう頑張ります。よろしく願いいたします。

所属掛 図書掛

編集後記



この4月、教育学研究科は改組され、新しい講座が出発しました。グローバル教育展開オフィスも設置され、私たちの教育学研究もますますの国際展開が求められています。グローバルに発信できる内容を・・・と思えば、実際には私たちのoriginality、ひいてはoriginとは何なのかを問い直すことが求められるのを実感しています。現在、70周年に向けた企画も動いています。温故知新を目指したいと思う今日この頃です。(KN)

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

- 委員長 桑原 知子 教授 (臨床心理学講座)
- 委員 稲垣 恭子 教授 (教育学研究科長・教育学部長)
- 委員 西岡加名恵 教授 (教育・人間科学講座)
- 委員 佐野真由子 教授 (教育社会学講座)
- 委員 小西 博之 事務長
- 委員 鞠 尚子 総務掛長
- 委員 辻 幸代 教務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛

TEL 075(753)3000

ホームページ <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp>